
ISブレイク

タナトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISブレイク

【Zコード】

Z8088Y

【作者名】

タナトス

【あらすじ】

一人の男が『ボーダーブレイク』をプレイし終え、家路に帰る途中、事故にあう。

しかし、男は死なかつた。

コレは男がISの世界でボーダーと偽り生きていいく事を決断した話。さあ、偽りのボーダーよ境界を破壊しろ！！

プロローグ

一人の男がゲームセンターの自動ドアから鼻歌交じりに出てきた。

歳の頃は20中くらいだろうか。

男はタバコと取り出すとスナップを利かせてタバコをソフトパッケージから1本上げる。

ソレを口に銜えるとジーパンのポケットからジッポを取り出しなれた手付きで蓋を親指で弾きフリントを擦る。

フリントとウイックが擦れ火花が走り火繩が点火する。

淡いオレンジ色の炎が灯ると男は炎にタバコの先端を近づける。

タバコの葉と巻紙が焼ける匂いが男の鼻腔を擦る。

男はこの瞬間が堪らないと言わんばかりに肺一杯にソレを吸い込んだ。

「……ふ~~~~~~」

男は吸い込んだ紫煙を吐き出しながらジッポの蓋を閉じポケットの中にソレを仕舞う。

男はそう言ひながら玄関先にある灰皿に灰を落としながらそつ吐いた。

「それに苦節10ヶ月でようやっとB1……社会人で仕事しながらだからだからな……」

彼は入社2年目の社員だ。勤め先は中企業で給料もそんなに良い訳ではない。

彼は家賃、光熱費、食費と貯金とタバコ代と車の維持費を除けた金額、35000円でこのゲームをプレイしていた。

文字道理、財布がボーダーブレイクしそうな勢いだ。

ただ、溜めた貯金を切り崩さないだけ廢人よりはマシと言つレベルだろう。

「諭吉大先生がギガノト流弾砲喰らつたみたいに吹つ飛ぶ姿は切ないぜ……」

ボヤきながら男は鬱屈した気分を振り払うが如く吸い込んだ紫煙を
思いつきり吐き出した。

暫くタバコを楽しんだ男は吸殻を灰皿に放り込むとパークリングに止めていた愛車の所まで歩く。

「わい……帰つてメシ作るか……」

男がボヤきながらインテリジェンスキーのボタンを押して愛車の口

ツクを解除すると突如としてスキル音が男の耳に飛び込んできた。

「何だ？」

男がそうボヤいた時には時既に遅かった。

男の目の前に大型ダンプカーのボンネットが見えていた。

HSブレイク 1話 「境界を飛び越えた男』

ここはHS学園、HS、『インフィニット・ストラトス』と書つパワードスーツの操縦者及び整備士、管制官、開発者を育てる高等学校である。

湾岸エリア直ぐ近くに場所を構え、その広さは力ナリ広大な土地を有している。

その職員室に2人の女性が向かい合つて話していた。

一人は黒髪をポニーテールに束ねた目付きが鋭い美女、もう一人は緑髪のショートヘアでメガネをかけた物腰穏やかな女性だ。

この二人に共通点があるとするならばこのHS学園の教師でスタイル抜群の美女と言つた所だろうか。

緑髪の女性、山田 真耶が黒髪の女性、織斑 千冬に語りかけた。

「しかし、驚きましたよ。あの二コース」

真耶の言葉に千冬は思う所があるのか曖昧に返事を返した。
はつきり言えば彼女らしくない。

「ああ、例の……」

それに気付かず真耶は話を続ける。

「まさか男性でエスを動かせるなんて。しかもソレが織斑先生の弟さんだなんて」

その言葉に千冬は弟の織斑一夏の顔を思い出す。

そんな時だった。

突如として振動が窓を揺らす。

「「な!?」」

2人がそう言つた瞬間、校内にアナウンスが流れる。

『第3アリーナに侵入者あり！ 待機中の担当職員は直ちに現場に向かわれたし』

その放送を聞くが早いか千冬は真耶に告げる。

「山田先生！ ここから我々が近い。行きましょう」

「了解です」

そう言つと彼女達は窓から飛び降りエスを装着し空へと飛び上がった。

二人が到着した時、二人は我が目を疑つた。

約5、6メートルのスノーホワイトに塗装され、左肩には二日月に『砲』と言うエンブレムがあしらわれたロボットがアリーナ中央に大の字になつた状態で寝転んでいた。

真耶はソレを見ながら啞然とする。

「な、何なんですか！？」「レー？」

驚きながらも真耶はラファールのライフルを油断無く構える。

「解りません……唯言える事は我々の知らない未知のロボットと言つた所でしょうか……」

千冬も困惑を何とか隠しながら真耶の疑問に何とか答える。

しかし、困惑の中につても彼女は打鉄の日本刀型ブレードを油断無く構える。

何せ相手のロボットの右手には戦闘機に搭載するような大きさのガトリング砲が握られていた。

見た目は損傷らしい損傷が無い事からも油断できない。

幾ら世界最強の兵器と銘打つEISでも攻撃を受け続けければシールドエネルギーがエンブティーとなり使用不能になる。

未知の敵となるかもしれないモノに油断を持ち込む程彼女達は甘く

ないのだ。

背中にも何やら物騒な代物がありそうだ。

彼女達が油断無く近付こうとした時だった。

突如、ロボットが発行する。

「「ツー？」」

二人は大急ぎでロボットから距離を取る。

光が晴れ渡り突如としてショートヘアの男が姿を現す。

「「なー!?」」

二人は何が何やら解らないままそう唸つた。
いや、この場合、唸るしかなかつたという方が正しい。

「う、ロボットが男性に……」

真耶の啞然とした呟きに千冬が如何したものかと頭を抱えるのだった。

男が田を覚ましたのは保健室だった。

「知らない天井だ……」

どうやらボケる余力はあつたらしい。

しかし、男が自分が事故った事を思い出すと上半身が跳ね起きる。

「 そ う だ ！ ！ 僕 は 事 故 つ て と 言 う 事 は こ こ は 病 院 ？ う や ら 助 か つ た み た い だ 」

そう言いながらも男はふと不思議に思った。

れない。

「可笑しいぞ……何で俺の体が無事なんだ？ 相手はダンプカーだぞ！？ ミンチより酷い状況でも可笑しくないのに……」

そう言いながら男は自分の上半身を触る。

男はそう叫びながら自分の着ている服を見た。

そう、服装は何とボーダーが身に付けるパイロットスーツの様なものだった。

男は慌てて当たりを見回す。

其処に備え付けの流しと鏡があった。

男は大急ぎで鏡を見ると睡然とした。

其処には自分の顔と違う別人が写っていたのだから。

一方、千冬と真耶は男の持ち物を検めていた。

物品は携帯電話の様なこの世界の常識から考えられないハイテクな端末とタバコとライター、そしてIDカードと腕時計だった。

「何ですかね……」れ……」

真耶の困惑交じりの疑問に千冬が答える。

「タバコとライターは兎も角……この携帯端末とカード、そして腕時計……さて、どん物やら」

千冬の言葉を他所に技術科の女性教員が悲鳴を上げた。

「そんな馬鹿な！？　この腕時計……どうだと書いたの！？」

その叫びに千冬と真耶が反応した。

「何だと……」

千冬は何とか自身の驚きを整理してやつと言つた。

真耶はやはり驚きを隠せない。

そして、調査が進むにつれ端末とカードの使い方が判明したのだった。

男は何とか心を落ち着かせると現状を理解する為に部屋を見回す。

（何て事は無い。何処にでもあるような医務室だ……戸棚には消毒液やら包帯やらガーゼやらが置いてある。問題は入り口の扉に鍵がかかっていて出られない。窓も見たけじれりとう階位の高や……飛び降りたらよくて骨折だな……）

そんな事を考へていると突如、扉が開いた。

男は扉の方を見やりながら身構えた。

「ああ、田が覚めたのか？ 丁度良かつた。お前に聞きたい事がある」

千冬がそう言いながら男の所まで歩み寄る。

（何て美人なんだ……スタイルもいい……しかし、雰囲気はカナリ鋭いな……町でいたらナンパしたくても出来ないよ……）

そんな事を思つている事を知つてか知らずか千冬は男に自己紹介をした。

「私は織斑 千冬。IS学園で教鞭をとる者だ」

その言葉に男は内心驚いた。

（織斑……千冬……だと!? それにIS学園!? んじゃ何か!? ここはインフィニット・ストラトスの世界か!? そんな馬鹿な!? ライトノベルのお話の世界に俺は迷い込んだのか!? Sでよくある転生しちゃった とかそんな状況か!? 俺は!?)

はつきり言つて混乱の極みにある男に千冬はこう言つた。

『ジン・キサラギ、ボーダーID×××××12、ボーダークラスB1・通り名は鮮やかなる戦士、ニユード耐性細胞、通称ボーダーの保有者であり、最大手PMC、マグメル所属の派兵社員でブラスト・ランナー、通称、ブラストの操縦者、搭乗ブラストは、ヘッドはクーガー?型、ボディーはエンフォーサー?型、アームとレッグはケーファー42、機体ペイントはオールスノーホワイト、武装はメインがGAXエレファント、サブがサワードロケット、補助兵装は試験型ECMグレネード、特殊兵装がバリアユニットといったな重火力兵装だな……』

男は啞然とした。

いつの間にやら男はボーダーなんかになっていた。

少なくとも田の前の千冬は男を傭兵と勘違いしている様だ。

（何でボーダーブレイクの事やブラストや俺の通り名を知つてんだ！？ いや、そんな事より如何する！？ こんな状況で俺、実は一般のサラリーマンですなんて言えないよ……それになんか知らんがこれ以上事態が悪くなる。下手したら変な施設に入れられて一生塀の中かもしれない…… こうなつたら生き残る為にウソを付くしかないのか……）

男は観念するような演技をして千冬に語りかけた。

「……どうして俺の素性を…… マグメルのセキュリティーは完璧な筈だ。たかがB1のランカー風情とは言え正規の派兵社員だ。個人情報は顧客との取引が完了してマグメルが派兵定員を決めてからそこで初めて社員の情報が開示される筈だ。しかも、得意先の2社のセキュリティーも完璧な筈…… それにたかがB1ランカーの傭兵の事など気にも留めない。最低でもAクラス以上でないと誰も関心を示さない。この家業を始めて10ヶ月になるが其処まで有名になつた覚えは無い。何故、俺の名と機体を？」

その言葉に千冬は無言で携帯端末とエロカードを取り出した。

「Iの端末にカードをスロットして解つた事だ。お前の戦歴や機体状況までしるされていた」

その言葉に男は身構えながら問いかける。

「何が目的だ？」

男の問い掛けに千冬は答える。

「君の持ち物の中からISが発見されたソレもコアナンバーが無い
ノーナンバーのISだ」

その瞬間、男は内心驚いた。

（何の冗談だ！？ ISだと……）

男は内心驚きながらも知らないフリをして質問した。

「話が見えない……そもそもISとは何だ？」

その質問に千冬が答える。

『インフィニット・ストラトス』通称IS、篠ノ之 束が開発した
マルチフォーマルスースで元々は宇宙進出の為に開発されたがその
兵器的側面は旧世代兵器を遥かに凌駕し世界最強の機動兵器の座を
欲しいままにした。

しかし、このISは大きな欠点があつたソレは女にしか扱えない兵
器であると言う事だ。

何時しか世界は女尊男卑の世の中となつた。

そして、今この場所はそのISのパイロットを育成する機関、IS
学園の保健室である事も把握した。

取り敢えずのあらましを聞いた男は質問する。

「どうやら俺は別の世界とやらに来たみたいだ……しかもISを持つて……状況は理解した。で、貴女は、いや、貴女の後ろにいる人間、多分政府機関だろうが俺に何をさせたい？」

「お前にやつて貰いたい事はお前が持つっていたISの機動試験との調査とIS学園生徒として学園に通つてもらひ」

ソレを聞いた男はまた問う。

「報酬は？」

「君の衣食住の確保及び、日本政府による身分証明の発行。ISの最新開発情報の一部開示と調査協力費として月50万円の支払いと特別依頼手当でが別途支給となる。質問は？」

「特別依頼の内容とその資金の上限は？」

「依頼内容によつて君が判断し報酬を決められる」

その言葉に男は皮肉る。

「たかがB1風情に過度な期待だな……まあ、モルモットにされる慰謝料と思えば足らないか？ それとも身分と衣食住を保障してやるから感謝しようと？」

その言葉に千冬は表情を崩さず言い放つ。

「中々辛辣だな。まあいい。返答は？」

その言葉に男は更に皮肉を言つ。

「コレだけ待遇がいい依頼はそつ無いからな。まあ、最も、俺の意見などあって無きが如しからな……良いだろ？その依頼了承した。契約書は24時間以内に作成して貴女とこの責任者のサインを貰おうか。勿論、公文書として残る形でだ」

千冬は肩を竦めながら溜息を吐きながら言つ。

「ずいぶんと用心深いのだな」

男は鼻を鳴らしながら言つ。

「俺の生命線だ。反故されでは堪らないからな」

「ついて、男改めジン・キサラギは異なる世界に立つた。

ISブレイク 機体説明

主人公機

重火力ブラスト（仮）

兵装

GAXエレファント

GAXガトリングガンの派生型で、3連の大口径銃身が特徴。通称「象」

秒間約13発。瞬間火力4933、マガジン総火力88800。0Hまで掃射したときの総火力は27380。最大射撃可能時間18秒（1マガジン）

概要

連射性能と装弾数を犠牲にした代わりに連射精度と威力が大幅に向上した破壊力重視型ガトリングガン

サワードロケット

総火力：44000。1mあたり880dmが減衰。

ダメージ装甲効果：大破D+（-1.38m）、ダウンHG
A+（-4.82m）、ノックバックALL（4.97-7.4m）

概要

重火力兵装副武器の初期装備。

胴体中央を精確に捉えた直撃ならば平均装甲D+より低い機体であれば大破・フルHG3のA+、以外は吹き飛ばせる火力に、程よい広さの爆風範囲と使い勝手が良い。

リロードも速く重量も軽いので、後で作れるサワード系と比べても決して劣らない性能で、バランスの取れた汎用性の高さが魅力の一品。

5発という余裕ある弾数や、サワード系の中でも高めの弾速とリロードで安心感がある。

試験型ECMグレネード

起爆までの時間は 約0・5秒で、ジャミング効果の持続時間は約3・5秒。

概要

ECMはElectronic Counter Measureの略で電子妨害兵器である。

初期型に比べ効果時間が短く、ジャミングの程度はやや弱いが、効果範囲が広く、起爆時間も非常に短いのが特長。

バリアユニット

バリアユニット系統の初期型。

概要

照準方向前面に半球状のバリアを展開する。バリア展開位置から見て側面や裏からの攻撃は防御不可。上下に照準を動かせば、バリアの展開位置も上下に動く。

HSブレイク 3話『その女は白虹（じらりゆめ）』

ジンはHS学園の第2アリーナの管制室にいた。

何故この様な所にいるかと言えば、千冬が連れて来たからに他ならない。

「今回、お前が行う事はお前が持っていたHSの起動試験だ。内容はHSの展開のHS機動試験をやつてもらひ。大まかな内容はHSの基本操作の完熟と兵装確認及び簡単な模擬戦だ。質問は？」

その問い掛けにジンは完結的に答えるだけだった。

千冬から渡された腕時計を左手首に巻きつけると千冬はソレを確認して言つ。

「HSは今待機状態にある。お前が念じればHSは装着される」

（ああ、そう言えば一夏も籌もそんな事してたっけか……）

ジンはそう思いながら瞳を閉じて左手を前に掲げた。

その瞬間、ジンの体が光に包まれる。

脚部パート、ボディーパート、腕部パート、そして頭部パートが一瞬で装着された。

千冬はIS装着が完了したのを見ながら感心して呟いた。

「まさか、ISを知らない素人が行き成り1秒以内にISを稼動出来るのは思わなかつた」

ジンは別段気にする素振りを見せずに千冬に問ひつた。

「ISは機動した。この次は?」

ACCESS

機械の音声と共にジンの目の前に次々とワインダーが展開していく。

また新たなワインダーが開きある画面を表示する。

『シールドエネルギー 現容量、5300』

ソレを見た千冬が驚きの声を上げる。

「何と言つシールドエネルギー蓄積量だ?……」

確かに言つてみれば確かに一夏の白式はアニメでは400チャヨットだつたはず。

ソレを鑑みれば確かに破格のエネルギーだ。

千冬は気を取り直してジンに語りかける。

「どうだ? 違和感は無いか?」

「なんとも無い。いや、まるで『イイツから語りかけてくれるようだ』」

その時だった、ウインドーとタッチパネル式キーボードが目の前に浮かび上がったのは、

この機体の名前を入力してください

ジンは暫く考えた後、自分のエンブレムを見てこの機体の名前を打ち込んだ。

白月

と

今度は歩いてカタパルトまで進むよう指示する。

ジンは難無く歩行してカタパルトに脚部コニットを固定させた。

この行動に千冬は内心戦慄した。

(馬鹿な……！？ IISを起動して数分だぞ！？ ソレが何でこんな簡単に完璧な歩行が出来るんだ！？ それにカタパルト固定シーケンスを無意識レベルで行っていた……)

千冬は驚いているがジンからすれば何をと思った。

ISHとは早い話がイメージインター フォイスで動いている。

ボーダーを動かす感じで動かせば簡単に動く。
早い話が思い込めばいいのだ。

自分の体と同じで。

ソレを意識的に行つか無意識で行つかの違いだ。

と、ジンは思っていた。

実際、ソレをヤレと言われて実際にやれる人間は少ないだろう。

しかし、ジンはロボットモノアニメや漫画を腐るほど見てきている。

そのイメージがこびり付いているからこそ簡単に出来た。

ソレを知らない千冬はただただ驚くしかなかった。

（問題は、俺の体がイメージ通りに動くかどうかが問題だらうな…
…肉体とイメージの不一致が起るとも限らない。歩く程度の動作
なら問題は無いんだろうけど）

そり、ジンは其処だけが心配だった。

老人を例にして例えるなら精神は若いつもりでも肉体は年と同じと
言つ状況で体を動かし、転倒する事がある。

それと同じ事がジンにも言える。

最も、この体のスペックの最高値や限界が何処にあるのかすらつかめないでは把握のしようが無い。

(じゅうじゆぶつけ本番か……)

肉体で見るなら前の自分より遙かに優れたスペックだらう。
前の自分はこんなに容姿がいい訳でも腹筋が6つに割れているわけ
も無い。

更に戦いに関係する知識が湧き上がる事など無かつた。

(どうやら不一致は精神と知識にあるらしいな……)

不思議な感覚である。

例えるなら本で読んだ知識がそのまま脳味噌にデータとして存在し、
感情がそれを読んでいると言った状況だ。

(成る程……だから表情が硬いのはそのためか……そのお陰で織斑
先生にはばれなかつたから不幸中の幸いだな)

そんな事を考えていると千冬から激が跳ぶ。

『何時まで其処にいるつもりだ？ 早く出ぬ』

そんな無茶など心で思いながらもジンはこいつってカタパルトを起
動した。

「白刃起動！ 出るぞ！――」

こうして偽りのボーダーは空へと押し出された。

（押し出されたはいいけど空を飛ぶ感覚がわからない……フワジャ
ンで浮き続ける感じか？ 色々と消費が激しそうだ……そう考
える一夏すぐくな。初手っぱちで行き成り空を飛んだんだから……ん
～が空を飛ぶ感じか？）

そう思った瞬間、白刃は空を滑るよつと上空へと舞い上がった。

まるで重力など其処に存在しないかのじとく。

それものの千冬もこの状況は理解の外だった。

（そんな馬鹿な！？ IHS操縦数分でみんな滑らかな飛行が可能だ
と！？ 確かにP.I.Cを使えば可能だが……ソレをこの男は知識も
無しにソレをやるだと！？）

驚いたのは千冬だけではないジン自身も驚いていた。

（「うわーん……こんな簡単でいいのか？ しかも止まれと思つ
たら上空で止まっちゃったよ……もしかして重力が存在しないのか
？ ない……試してみる価値はあるな……）

そう言つてジンは急速に直進する。

そして、左右の腕を超高速で振るつと同時に体を捻り左右の足も振
る。ひ。

そうするとP.I.Cを使わずとも速度を落とす事無く急速に白円はその向きを逆方向に変換して同じ速度で飛んでいく。

(アンバツクが出来るのか！？)

その行動に千冬は唖然とした。

(何だ！？ 今のは移動は！？ 通常ISの起動変更は反対方向にP.I.Cを起動するか大回りで反転するのが普通だ……ソレを大回りするどころかP.I.Cを使わずに体の動きだけで機体の向きを変えるばかりか起動補正すら行つただと！？)

其処に思い至つた時、千冬は寒氣すら覚えた。

(これを実戦の場で使うとまるで隙が無い。理にかなつた起動だ……確かにキサラギのクラスはB1だといった。最低でもA5からSS1まで15ランクがあるのだとすれば上位ランカーはどれだけ化け物なんだ！？)

千冬は知らないがA1から上は最早神を通り越して変態と言つねの紳士なのだ。

またの名をボーダー廃人とも呼ばれる。

因みに、SS1のランクイン条件は、
制限時間30分の間にメダル10枚集めろ
勝利・圧勝でメダル1枚
総合順位2位以内でメダル1枚
総合スコア60ptでメダル1枚

と言つ変態鬼条件をクリアした強者にのみ『えられるクラスであり最早称号の域である。

ジンもそんな人とは会つた事が無い。

最早雲の上の存在だ。

余談は兎も角、千冬は武装を試させるべくジンに指示を出した。

『次は武装だ。念じる様に武装を展開しろ』

そりゃわれジンは想像した。

漢のロマンであり自分が使つていた兵装を。

GAX-Hレフアントを。

ソレを見て千冬は次にターゲットをだした。

『それでターゲットを全て破壊しろ』

そりゃわれジンはエレフアントのトリガーを引き絞る。

モーターが唸りを上げて束ねられた3つの銃身を回転させる。

そして、秒間13発の勢いで弾丸が吐き出される。

僅か数秒ターゲットがボロ雑巾の様にズタズタになった。

（しかし……何て反動だ……まあ、ガト中最強威力は伊達ではない

みたいだ）

ジンは渋い顔をしながらエレファントをしまつと今度はサワードロケットを取り出し。
残りのターゲットに撃ち込む。

白い白煙が線を描きながら真っ直ぐターゲットに滑り込む。

命中と同時に爆発。近くにあつたターゲットすらも吹き飛んだ。

（サワードロの威力かよ！？　コング使つたらマジで周囲が吹つ飛び！？　でもまあ、1発ごとのロード時間と装弾数もあるからトントンか……）

試験型ECMやバリアも試したかつたが相手もいない。

そんな時だった。

千冬が模擬戦を行う事を提案したのは。

俺はその誘いに乗った。

HSブレイク 4話 「模擬戦』

アリーナの中央に一組の男女が立っていた。

ISを起動して。

男はその内面が読み取れない無表情で、女は何だか男の表情に怯えてるらしく緊張した面持ちで男を見据えていた。

ジンは向かい合つ真耶に頭を下げながら言つ。

「山田先生、ご指導の程、宜しくお願ひします」

「一、此方こそ宜しくお願ひしますね。キサラギ君」

そう、模擬戦の対戦相手は真耶だった。

『それでは、山田 真耶対ジン・キサラギの模擬戦を始める』

真耶は油断無くラフアールのライフルを構える。

そして俺もエレファントを構えた。

向かい合つ一人。

『始め!』

その瞬間、2人は高速で動き出す。

真耶の動きにジンは戦慄を覚えた。

（マジかよ！？ 動きに無駄が無いばかりか自分の有効射程の間合いをキッチリ確保しているだと！？ ）

エレファントを乱射しながらも真耶は巧みに攻撃を回避していく。

そして、隙あらば大口径ライフルで此方を撃ち抜く。

しかも確実に頭と心臓と言つシールドエネルギー消費が激しい所を狙うのだ。

ジンは直撃を避けながらも何とか喰らい付く。

しかし、真耶も自分の優位な距離を取りながら射撃する。

（クソ！？ やり辛い！－ エレファントだからこうも離れられた
ら弾がブレちまう。せめてすガトかキツツキだつたらこうもならん
だろうに）

一方の真耶もその火力に攻め手に欠いていた。

（とんでも火力ですね……それにガトリングの割りに一撃一撃が重
たい。シールドエネルギーが削られます。捌き切れない攻撃はバリ
アを展開してますけどソレすらガラスの様に碎けます。それにキサ
ラギ君がいい腕してます。何とか経験と射撃の基本戦術と応用で対
処してますけど、シールドエネルギーが何時無くなるか……ソレが

心配です)

両者拮抗する状態で普段のジンではしない様なミスをしてしまつ。

OHレフアントOH

目の前にウィンドーが開きそつ表示された。

「しまつた！！ バレルがOHした！！ クソ…！ マジかよ…？」

慌ててジンはサワードロケットを装備した。

「」を見た真耶はチャンスと捉える。

（ミスをしましたねキサラギ君。私はそのミスを逃すほど甘くありませんよ？）

そこで真耶は大口径ライフルから小口径サブマシンガンに切り替えて射撃する。

しかし、ジンは微笑んでいた。

（え……？）

その表情に真耶は疑問を持った。

しかし、と振り切りサブマシンガンのトリガーを引き絞る。

放たれた小口径弾丸は1発残らずジン田掛けて殺到した。

しかし、ジンは動かない。

そして……

突如としてジンの目の前で弾丸はすべて弾き返された。

「ウソ！？ 何で！？」

そう、ジンが試していなかつた特殊兵装、シールドを展開したのだ。

慌てて真耶は大口径ライフルで再度ジンを撃つがソレすら不可視の壁に阻まれる。

動搖する真耶に決定的な隙を見たジンは急接近をかける。

「ツー！？」

慌てて真耶はグレネードランチャーを数発叩き込むもシールドにより爆発と爆風さえも阻まれた。

「そんな！？」

更に動搖する真耶に追い討ちを掛けるべくジンは試験型ECCMグレードを真耶に投げ込んだ。

0・5秒でグレネードは爆発。

真耶の周囲に金属片と妨害電波を撒き散らす。

そして突如真耶の目の前にウインドーが大量に開きその全てのウインドーが砂嵐を映し出した。

ハイパー・センサーも砂嵐。

音声すら雜音

真耶のラファールは完全にその視力と聽力を寸断された。

111

真耶は啞然となりながらも何とかその状況を開拓しようとするがその時にはジンを見失っていた。

「何處！？」

その言葉と共に背中から爆風と衝撃が叩き付けられる。

~~~~~4#

爆風と衝撃で地面に叩き付けられる真耶。

不意打ちだつた。

モロに喰らつたから絶対防衛が発動し、ラファールの4分の3のシールドエネルギーを持つていかれた。

地面に叩きつけられそうな所で何とかPICOを開けた。

しかし、突如、ロックオン警告が真耶の耳に飛び込んできた。

「え？ 左！？」

その時振り向いた真耶の目に飛び込んできたのは銃身を回転させているエレファントを持ったジンだった。

長大なマズルフラッシュが真耶の視界を覆い隠し、無数の衝撃が真耶を襲つた。

『それまでー！ 山田機シールドエンブティーによりキサラギ機の勝利』

そのアナウンスと共に模擬戦は終了した。

## HSブレイク 4話 「模擬戦」（後書き）

EMCは中々如何様臭い性能ですな……

あれやられると気が付いたら自分が撃墜されていると言うのがザラです。

正に重火の切り札です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8088y/>

---

ISブレイク

2011年11月24日21時53分発行